

本文中の( )に入れたアラビア数字は「真名序」の文中の同じ数字をつけた文章に相当することを示す。< >に入れた数字は「仮名序」にだけある文章である。この番号により、両序を比較対照せられたい。

なお、本書の底本をはじめ多くの古写本には、この文章の前に「序」または「仮名序」というような題がなく、「やまとうたは……」という本文からただちに始まる。

「真名序」などに使われる「倭歌」「和歌」という文字をヤマトウタと読んだもの。「伊勢物語」八十二段その他の仮名文学にもやまとうた」という用例があるが、「古今集」ではこだけである。

二人の心を種にたとえ、言葉を種から生じる植物の葉にたとえてい。言葉は葉に言いかけた歌は本集に多くみられる。「六・大・吉・吉・大・大」

三今の河鹿である。  
四生きていくすべてのもの。  
五「鬼」も「神」も死者の靈魂。これも「真名序」の「鬼神」をオニガミと読んだもの。

六人間の文化現象が天地とともに起こったとするのは中国の思想であった。新渡六郎『支那学研究』第十号、吉川幸次郎『中国文学報』第三四。

七以下、小活字の部分はすべて毒舌と呼ばれ、この部分をもたない古写本もあるほどで、「仮名序」の原形にはなかつたのであろう。

〔一〕和歌の本質  
と効用  
①やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、こと

わざ繁きものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。②花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。③力を

も入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。

〔二〕和歌の起源  
④この歌、天地のひらけ初まりける時よりい

しああれども、世に伝はることは、久方の天にしては下照姫に始まり、

下照姫とは、天稚御子の妻なり。兄の神のかたち、岡・谷に映りて輝くをよ

〔一〕やまとうたと申しますものは、人の心を種にたとえますと、それから生じて口に出た無数の葉のようなものであります。この世に暮らしている人々は公私さまざまの事件にたえず応接しておりますので、その見たこと聞いたことに託して心に思っていることを言い表わしたものが歌であります。花間にさえずる鶯、清流に住む河鹿の声を聞いてください。自然の間に生を営むものにして、どれが歌を詠まないと申せましようか。力ひとついれないで天地の神々の心を動かし、目に見えないあの世の人の靈魂を感激させ、男女の間に親密の度を加え、いかつい武人の心さえもなごやかにするの

が歌なのであります。

〔二〕この歌は、天地創成の昔から世に現われております。

〔三〕この歌は、天地創成の昔から世に現われております。

〔天の浮橋の下でイザナギノミコトとイザナミノミコトとが結婚なされたことをつたうたった歌である〕

しかしながら、後世に伝わるについては、天上界ではシタテルヒメのお歌に始まり、シタテルヒメはアメワカヒコの妻である。ヒメの歌とは、その兄君のアジスキタカヒコ

八 天地創造の二神が唱和したのであるが、唱和のことばは種々の伝えがあつて一定してはいない。

二 下界を平定するために派遣されたアマワカヒコ(古注には「あめわかみこ」)が國つ神の娘シタテヒメを妻として天上に帰らなかつた。アマワカヒコの葬儀に列した姫の兄アジスキタカヒコネノカミ。その美しさをたたえた歌が『古事記』『日本書紀』などにある。

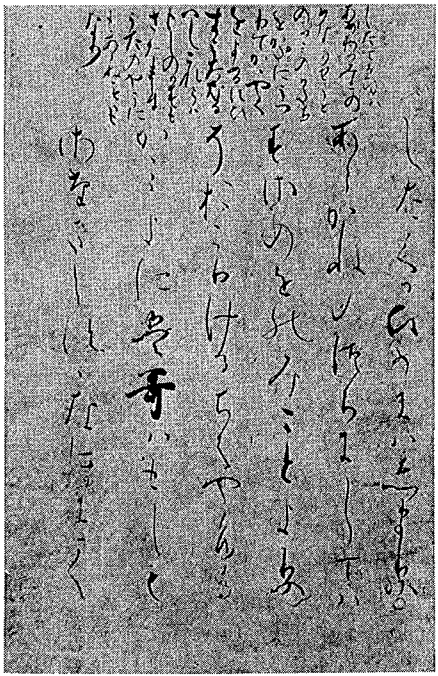
一 右の歌を『日本書紀』で夷曲(ヤマト)というのを誤ったものだらう。二 土・地の枕詞。

三 アマテラスオオミカミの弟(後の古注で兄とするのは不可)。四 ここでは「神代」の「神」の枕詞。五 「神代」は神代七代をいい、後の「人の世」はアマテラスオオミカミ以後をいう(奥村恒哉『神道史研究』第七卷第四号)。「神代」と「人の世」は年代を主としていい、前の「久方の天」と「あらかねの地」は場所を主としていいものだから、それぞれ別の語が区別しようとしていられるのはほとんど同じである。六 クンナダヒメとの結婚をいう。七 次の歌の「八雲」はみくごな雲の意であるが、古注は誤つて「八色の雲」と解したのである。

八 白楽天(李白)の詩「千里へ足下ヨリ始マリ高山ハ微塵ヨリ起ル。吾ガ道モ亦此クノ如シ。之ヲ行ナウコト日ニ新タナルヲ貴フ」による。

める夷歌なるべし。これらは、文字の數も定まらず、歌のやうにもあらぬことどもなり。

あらかねの地にしては、素盞鳴尊よりぞ起りける。(5) ちはやぶる神代には、歌の文字も定まらず、素直にして、言の心わきが



〔清輔本露経閣文庫蔵〕

たかりけらし。人の世となりて、素盞鳴尊よりぞ三十文字あり一文字はよみける。

素盞鳴尊は天照大神の兄なり。女と住み給はむとて、出雲國に宮造りしたまふ時に、その所に八色の雲の立つを見てよみたまへるなり。

八雲立つ出雲八重垣。龍めは八重垣つくるその八重垣を

⑥ かくてぞ、花をめで、鳥をうらやみ、霞をあはれば、露をかなしぶ心・言葉多く、さまざまになりける。遠き所も、いでたつ足下より始まりて年月をわたり、高き山も、麓の塵泥よりなりて天雲たなびくまで生ひ上れるごとくに、この歌もかくのごとくなるべし。(7) 難波津の歌は、帝の御初めなり。

大鷦鷯の帝、難波津にて皇太子と聞えける時、春宮をたがひに譲りて位に即きたまはで、三年になりければ、王仁といふ人の詠り思ひて、よみて奉りける歌なり。木の花は梅の花をいふなるべし。

安積山の言葉は、采女の戯れよりよみて、

葛城王をみちの奥へ遣はしたりけるに、國の司、事おろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、すさまじかりければ、采女なりける女の、土器とりてよめるなり。これにぞ王の心とけにける。

この二歌は、歌の父母のやうにてぞ手習ふ人の初めにもしける。

〔三〕和歌の姿

⑧ そもそも、歌のさま、六つなり。唐の詩にもかくぞあるべき。その六種の一つには、そ

へ歌。大鷦鷯の帝をそへ奉れる歌。

難波津に咲くや木の花冬こもり今は春べと咲くや木の花

ネノカミの美しい姿が丘や谷に照り輝くのを賛美してうたった夷曲の歌をさすのであらう。これらの歌は音數も不定で、歌の体をすらなしていないものである。

下界ではスサノオノミコトのお歌に由来しております。神代にあっては歌の音數も一定せず、飾り氣なくありのままにうたいましたので、うたわれていることの意味を判断と識別しにくかつたのに相違ありません。それが人の世となりまして、スサノオノミコトの時から初めて三十一文字の歌を詠むことは相成りました。

〔スサノオノミコトはアマテラスオオミカミの兄弟である。ミコトのお歌とは、后とお住まいになるために御殿を出雲國にご造營なされた時に、その土地に八色の雲が立ち上るのをご覧になって詠まれた次の歌である。立ち上るまごな雲のような出雲の垣を、妻をこもらせるために幾重にも巡らそう。その垣をな。〕

以来、花をほめ、鳥を慕い、霞に感じ、露にひかれる心は多端となり、歌はさまざまになりました。それはあたかも遠方への旅立ちでも出発の第一歩から始めて長年月にわたり、高山の出来上るのも麓の塵や泥土の集積から、空の雲のたなびく高さまで成長するように、歌もかような発達を遂げたのでありましょう。『難波津』の歌は帝

の御代の初めの歌であります。

〔仁徳天皇が難波でまだ皇太子でいらした時、弟皇太子と皇太子の位を互いに譲り合つて即位なさらず三年経つてしまったので、王仁という人が不安に思つて詠んで差し上げた歌である。木の花は梅の花ということであらう。〕

〔安積山〕の歌は采女が戯れながら詠んだ歌であります。

〔葛城王が東北地方に派遣された時に、その地方の役人の接待が粗略だとお叱りつけられ、宴席など用意してあったのにご機嫌が悪かつたので、かつて都で采女だった一女性が杯をとりお酒をすすめながら詠んだ歌である。これであつたと王のご機嫌がなおつたのである。〕

この二首の歌は歌の父と母であると言ひ伝えられ、手習いをする人が真つ先に習つた歌でもあります。

〔三〕さて、歌の表現形式には六種類あります。それは中国の詩歌にも同様のはずであります。その第一は「そえ歌」で、たとえ、仁徳天皇にそれとなく意見を申し上げるために詠んだ次の歌などでありましょう。難波津に梅の花が咲いています。今こそ春が来たとして梅の花が咲いています。

第二は「かぞえ歌」で、次のものなどでありましょう。

きれいな花に心を奪われた身の上はな

の順で「真名序」の六義に相当する。そを歌とはその歌で表面的に詠まれていることと直接関係のない、真の意味を相手に伝えようとした歌。三「咲く木の花よ」「や」奥。三「次」の句「春」の枕詞。

一物の名前を羅列し、数え上げる歌。次の例歌のように縁語・掛詞・隠し題などの技法を伴うことが多い。三「や」小町の歌などこの傾向のものが多い。

二「この歌には」「つぐみ」あざ「たぶ」の鳥名が隠され(久松潜)、「いたつき」(病氣)と矢の一種、「いる」(入る)と「射」(る)が掛詞。三「この句をばはじめ、古注の説は『毛詩正義』唐の詩経の注釈書(の六義の説明)に多くよっている。

四「例歌から帰納すると、仮名序の筆者はなすらへ歌とその次のたとえ歌とを比喩的表現を用いた歌としか考えず、特に区別しなかつたらしい。

五「あなたに逢った翌朝の「今朝」は霜を眺めている現在の意味であるが、無理な表現である。六「初句から霜」までが次の句の「おき」(置き)「起き」の掛詞の序詞。

七「消え」が上の「霜」の縁語。八「たらしめ」は親の枕詞。第三

と「へるなるべし。二つには、かぞへ歌。

咲く花に思ひつく身のあぢきなき身にいたつきのいるも知らずて

と「へるなるべし。

これは直言にいひて、ものに譬へなどもせぬものなり。この歌、いかにいへるにかあらむ。その心、えがたし。五つに、ただごと歌といへるなむ、これにはかなふべき。

三つには、なすらへ歌。

君に今朝朝の霜のおきていなば恋しきごと消えやわたら

む

と「へるなるべし。

これは、ものにもなすらへて、それがやうになむあるとやうにいふなり。この歌、よくかなへりとも見えす。

たらしめ親のかまの繭ごもりいぶせくもあるか妹に逢はずてかやうなるや、これにはかなふべからむ。

四つには、たとへ歌。

わが恋はよむとも尽きじ荒磯海の浜の真砂はよみ尽くすと

も

んとはかないものだろう。鳥は猟師の恐ろしい矢が今にもわが身に射込まれることを少しも知らないのだから。

「この種の歌はものありのままに述べ、比喩などをしないのである。右の例歌はどんな言回しをしているのだろうか。意味をとりにくいのである。五番目の、ただごと歌といっているものが、この例歌に相当であろう」

第三は「なすらへ歌」で、次のものなどでありましょう。

あなたに逢った翌朝は霜が真つ白におきました。そして、あなたが起きて帰ってしまえば、私の恋しさがつのるたびに心は霜と一緒に消えるように悲しみ続けることでしょう。

「この歌はうたいたい事柄を何かになぞらえ「何々」のようである」とうたうのである。右の例歌は非常に適していると思われぬ。母が飼っている蚕が繭にこもってふさぎ込んでいるように、私の心ははればれしない。彼女に逢うことができないのだもの。こういうのが例歌に適しているようにか」

第四は「たとへ歌」で、次のものなどでありましょう。

私の恋の思は数えても尽きることはいあるまい。たとえ波の荒い海岸の砂を数えつくすことができようとも。

「この歌はありとあらゆる草木・鳥獸に託し

と「へるなるべし。これは、万の草木鳥獸につけて、心を見するなり。この歌は、隠れたる所なむなき。されど、初めのそへ歌と同じやうなれば、すこしさまを変へたるなるべし。

須磨の海人の塩壺く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

この歌などやかなふべからむ。

五つには、ただごと歌。

つはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしか

らまし

と「へるなるべし。

これは、事のととのほり、ただしきをいふなり。この歌の心さらにかなはず。とめ歌とやいふべからむ。

山桜飽くまで色を見つるかな花散るべくも風吹かぬ世に

六つには、いはひ歌。

この殿はむべも富みけり三枝のみつばよつばに殿づくりせ

り

と「へるなるべし。

これは、世をほめて神に告ぐるなり。この歌、いはひ歌とは見えすなむある。春日野に若菜つみつつ万代をいはふ心は神ぞ知るらむ

作者の心を表現するののである。右の例歌には、裏の意味というものが全くない。この歌には裏の意味が必要なのであるが、最初のそへ歌と同じようになるので、少し形式を変えたであろう。

須磨の漁師が塩壺を焼いている煙は風が強いので、意外な方向にたなびいてしまった。この歌などが適しているであろうか」

第五は「ただごと歌」で、次のものなどでありましょう。

この世にもし虚偽というものがなかつたならば、人がささやく優しい言葉がどんなにうれしく感じられるだろうか。

「この歌は事物が安定して正しく行なわれていることをうたうのである。右の例歌の趣旨はいっそう適切でない。この程度の歌なら「求め歌」といえばよいだろうか。適当なのは次の歌である。」

山桜の美しい色を思う存分見たものだ。花が散りそうな風さえも吹かないご時勢だもの」

第六は「いはひ歌」で、次のものなどでありましょう。

なるほどこの御殿は豊かに富んでいる。棟が三つにも四つにも分かれるような建築の仕方である。

「この歌は世を賛美し、神に告知するものである。右の例歌はいわひ歌の性格をもつとは思われぬ。」

春日野で若菜を摘んで万世の繁栄を願う心を

三 枝が三つに分かれる植物で、  
三三三「中」などの枕詞となる。  
三 棟が三つも四つも続いた意と  
いうが、他の説もある。なお、こ  
の歌と同様の催馬楽がある。  
三三三

一 以下が「真名序」の六義を検  
討した後で古注の筆者の結論。  
批判的・懐疑的な意見であるが、  
このほうがむしろ公正であろう。  
二 うわべだけの美しさを競うおも  
むき。  
三 政教に役立たない歌はむだだと  
いう「假名序」の考え方である。  
四 「知れぬ」の枕詞。「埋れ木」↓  
六空。

五 公的な場所。帝の御前をさす。  
六 「は」の枕詞。「花薄」↓三三三  
「は」は「穂」と「秀」に「おつ  
びら」の掛詞。↓語。  
七 以下は「假名序」の作者が  
観念的に考えた和歌の理想的な  
方であった。  
八 「は」は「穂」と「秀」に「おつ  
びら」の掛詞。↓語。  
九 「は」は「穂」と「秀」に「おつ  
びら」の掛詞。↓語。

一〇 これまでが帝中心の歌である  
のに対し、以下は一般の人々の間  
での歌の状態を述べる。  
二 「さざれ石にたとへ」とは三三三の  
歌を詠んだことをさす。以下の十  
数行は本集所載の歌を具体的に示  
している。で、「假名序」が本集の

これらや、すこしかなふべからむ。おほよそ、六種に分れむことは、えある  
まじきことなむ。

〔四〕和歌の歴史

① 今の世の中、色につき、人の心、花になり  
にけるより、あたる歌、はかなき言のみい  
でくれば、色好みの家に埋れ木の、人知れぬこととなりて、ま



翁切

めなる所には、花薄ほに出すべきことにもあらずなりにたり。

② その初めを思へば、かかるべくなむあらぬ。③ 古の代々の帝

春の花の朝、秋の月の夜、と、さくらを召して、事に  
つけつつ歌を奉らしめたまふ。あるは花をそふとてたよりなき  
所にまどひ、あるは月を思ふとしてしるべなき闇にたどれる心々  
を見たまひて、賢し愚かなりとしろしめしけむ。④ しかあるの  
みにあらず、さざれ石にたとへ、筑波山にかけて君を願ひ、よ  
ろこび身に過ぎ、たのしび心に余り、富士の煙によそへて人を  
恋ひ、松山の音に友をしのび、高砂・住江の松も相生のやうに  
覚え、男山の昔を思ひ出でて、女郎花のひとつきをくねるにも、  
歌をいひてぞ慰めける。また、春の朝に花の散るを見、秋の夕  
暮れに木の葉の落つるを聞き、あるは、年ごとに鏡の影に見ゆ  
る雪と波とを歎き、草の露、水の泡を見てわが身を驚き、ある  
は、昨日は栄えおごりて、時を失ひ、世にわび、親しかりしも  
疎くなり、あるは、松山の波をかけ、野中の水を汲み、秋萩の  
下葉をながめ、暁の鴨の羽振きを数へ、あるは、呉竹の憂き節  
を人にいひ、吉野川をひきて世の中を恨みきつるに、今は富士

神様はきつとご照覧くださるであらう。  
こんな歌であつたら少しは適しているだらう  
か。大体、歌が六種類に分かれるということ  
がありそうもないことなのである。

〔四〕当節は世の中が華美に流れはじめ、人  
心がはでになつてしまつた結果、内容の乏  
しい歌、その場限りの作ばかりが現われる  
ので、歌というものが好色者の間に姿を隠  
し、識者たちに認められぬことは埋もれ木  
同然となり、まじめな公式の場に表立って  
持ち出せないことはすすきの穂にも劣る存  
在になつてしまつた。しかし、歌の起  
源を考えますと、こんな有様であつてはな  
らぬのであります。昔の代々の天子様は、  
花の咲いた春の朝、月の美しい秋の夜とも  
なれば、いつもお付きの人々をお召しにな  
り、何事かに関連させて常に歌の提出をお  
求めになりました。ある時は花に託して思  
いを述べると、不案内の山野をさまよひ、  
またある時は月をめでるために導き手のな  
い知らぬ土地をまごつき歩いた人々の心中  
をご覧になつて、彼らの賢愚を識別なさつ  
たのであります。かような時だけでも  
ありません。あるいはさざれ石にたとえて  
君の長寿を祝ひ、あるいは筑波山の木陰に  
誓つてお恵みをお願いし、自分を越えた幸  
福や心に包みきれない歓喜を人に知つても  
らうとか、富士山の煙になぞらえて人を恋

い、鈴虫の声を聞いて友の上を思いをはせ  
高砂・住江の松までが長年のなほみとして  
親しませ、男山のように強かつた壮年時代  
を思い出し、おみなえしのひとつきの盛り  
をかこつ場合にも、歌を詠むことが唯一の  
慰めだったのであります。また、春の朝に  
花の散る景色を見、秋の夕べに木の葉の落  
ちる音を聞き、あるいは鏡の中で年ととも  
に目立ってきた白髪と額の皺に嘆息したり、  
草の露・水の泡を見てわが身のはかなさに  
はつたり、あるいは昨日まで栄えおご  
つていた人がたちまち権勢を失つたり、貧  
困のために親しかつた人にまで疎んじられ  
たり、あるいは末の松山の波にたとえて愛  
を誓ひ、野中の清水にたとえて老人をいた  
わり、秋萩の下葉を眺めて独り寝を嘆き、  
鴨の羽がきを数えながら来ぬ人を待ち、あ  
るいは呉竹にたとえて世間の苦しさを訴え、  
吉野川にたとえて愛情のはかなさを恨む時  
など、すべてが歌にうたわれたのでありま  
すが、当節では富士の噴煙も上らなくなり、  
長柄の橋もなくなつたのだというのを聞  
く人は、これをまた歌によつて心の慰めを得  
ているのであります。

歌は以上のようにして古代から伝わつた  
のであります。これが特に普及したのは  
奈良時代からあります。その時の帝は歌

一 今、大坂市内の新淀川にかかる  
長柄橋があるが、当時のものの位  
置は不明。古今集時代に修理され  
た事実も明らかでない。で、「つ  
くる」は作る。「おろる」のどちら  
にも解せる。ただし、この句の上  
の「立」は「立」に對偶するために  
「風くる」のほうがよさそうである  
この橋については古いものとして  
(八六六・八七〇)も、かけ替えられた

ものとして(一三五)も詠まれた歌がある。

二奈良に都があった時代の意と解する(金子元臣説も同じ)。「仮名序」は和歌が特に興隆したのを奈良時代以後としているのである。

三「かの」はそのと訳す。

四人麿を正三位とするのは誤り。彼は奈良時代より前の人であるが、次に言及される赤人とまとめて大體の年代をいつたのであろう。

五「これ」とは人麿のような歌聖が帝に取り立てられたこと。次の文で具体的に説明している。

六次の古注に引かれた歌を詠んだことをさす。古注と本集三の左注でこの歌の作者として「なるの帝」は平城天皇をさすらしい。

七「大和物語百五十一段でもこの歌をならの帝の作とするが、「仮名序」の本文では「なるの御時」の「帝」とするだけで、不明。

八吉野山の桜を詠んだ歌は「古今集」の六・天八などがおそろしく最古で、人麿の歌には見当たらない。

上「秋の夕べ」の句と対偶せしめただけで、典拠はないとみる。

九「万葉集」の歌で奈良時代の人赤人が人麿と並称されたらしいことは「万葉集」の題詞(五五)からもうかがわれるが、「仮名序」ではそれがいつそう著しい。

一〇人麿と赤人が互いに相手の上にも下にも立たないから同等だということになる。こういう対句を中国の修辭法で回文対句(回文)という。

の山も煙立たずなり、長柄の橋もつくるなりと聞く人は、歌のみぞ心を慰めける。

古よりかく伝はるうちにも、なるの御時よりぞひるまりにける。かの御代や歌の心をしろしめしたりけむ。かの御時に、正三位 柿本人麿なむ歌の聖なりける。これは、君も人も身を合はせたりといふなるべし。秋の夕 龍田川に流るる紅葉をば帝の御目に錦と見たまひ、春の朝 吉野の山の桜は人麿が心には雲かとのみなむ覚えける。また、山部赤人といふ人ありけり。歌にあやしく妙なりけり。人麿は赤人が上に立たむことかたく、赤人は人麿が下に立たむことかたくなむありける。

なるの帝の御歌  
龍田川紅葉乱れて流るめりわたらば錦なかや絶えなむ  
人麿  
梅の花それとも見えず久方の天霧る雪のなべて降ればはほのほのとあかしの浦の朝霧に島隠れゆく舟をしそ思ふ  
赤人  
春の野にすみれ摘みにと来し我を野をなつかしみ一夜寝にける  
和歌の浦に潮満ちくれば瀧をなみ声べをさして鶴鳴きわたる

この人々をおきて、またすぐれたる人も、呉竹のよよに聞え、めてなむ、『万葉集』と名づけられたりける。

片々のよりより絶えずありける。これよりさきの歌を集めてなむ、『万葉集』と名づけられたりける。このこと古のことも、歌の心をも知れる人、わづかに一人二人なりき。しかあれど、これかれ得たる所、得ぬ所、互になむある。かの御時よりこのかた、年は百年余り、世は十つぎになむなりける。古のことも、歌をも知れる人、よむ人多からず。いまこのことをいふに、官位高き人をばたやすきやうなれば入れず。

そのほかに、近き世にその名聞えたる人は、すなはち、僧正遍照は、歌のさまは得たれども、まことすくなし。たとへば、絵にかける女を見て、いたづらに心を動かすがごとし。

あさみどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か  
蓮葉の濁りに染まぬ心もてなにかは露を玉とあざむく  
嵯峨野にて馬より落ちてよめる  
名にめでて折れるばかりぞ女郎花我おちにきと人にかたるな  
在原業平は、その心余りて、詞たらず。しほめる花の色なく  
て匂ひ残れるがごとし。

が干瀉がないので著の生えた岸辺を目ざして鳴きながら飛んでいく

これらの人々のほかに、なおすぐれた歌人が御代ごとにその名を現わし、その時々絶えず出ておりました。それより以前の歌を編集したものが現に『万葉集』と名づけられている歌集なのであります。

以来、昔の和歌の盛況をも歌の本質をも心得ている人はわずか一人二人でありました。それでもなお、彼らの間には長所短所というものが互いにありました。そして、その御代以来、年数は百年余り、ご歴代は十代を経過しました。その間、昔のことを承知し、歌を詠むことができる人はたくさんはありませんでした。それをここで申し述べますが、官位の高い方については軽率のようでありますので、数に加えぬことにいたします。

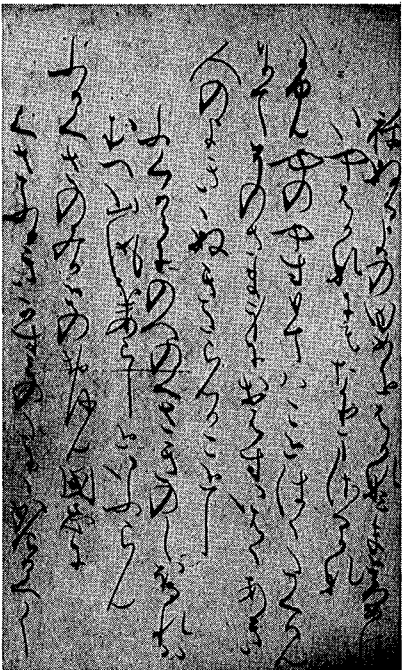
高官者以外で近代の有名な人をあげましょう。まず、僧正遍照は歌の姿はととつていますが、真実味が足りません。いってみれば、女性を絵に描いて人の心を動かそうとするが、迫力不足だというようなものであります。

「新芽の出た柳の枝を浅緑色の糸をより合わせたものとすれば、そこにおかれた白露は糸に貫かれた水晶の玉であろうか。

を増補訂正しているうちに、類似の語句をやむをえず二回使うことになったものと思われる。  
三「真名序」はここに小野篁・在原行平の名を上げる。この文までが『万葉集』編纂以後に歌が衰微した時代の記述である。  
四「たは接頭辞」「たやすし」で安易である、軽々しいの意。  
五「古今集」の時代から五十ないし三十年前後をいうらしい。  
六以下にあげられた歌人がいわずゆる六歌仙である。  
七「真名序」の「歌体」に相当する語、歌一首を個々のことばに分解せず、総合体としてみたもの。  
八六歌仙の批評はすべて何かにたとえた形であるが、そのことは「真名序」の頭注を参照されたい。  
九「遍照」の歌の読者が「心を動かす」という意であろう。  
一〇「三」  
一一「三」  
一二「三」  
一三「三」  
一四「三」  
一五「三」  
一六「三」

一「西」二「七」三「西」  
四「西」五「七」六「西」  
七「西」八「七」九「西」  
一〇「西」一一「七」一二「西」  
一三「西」一四「七」一五「西」  
一六「西」一七「七」一八「西」  
一九「西」二〇「七」二一「西」  
二二「西」二三「七」二四「西」  
二五「西」二六「七」二七「西」  
二八「西」二九「七」三〇「西」  
三一「西」三二「七」三三「西」  
三四「西」三五「七」三六「西」  
三七「西」三八「七」三九「西」  
四〇「西」四一「七」四二「西」  
四三「西」四四「七」四五「西」  
四六「西」四七「七」四八「西」  
四九「西」五〇「七」五一「西」  
五二「西」五三「七」五四「西」  
五五「西」五六「七」五七「西」  
五八「西」五九「七」六〇「西」

宇治山の僧喜撰は、詞かすかにして、始め終りたしかならず。



（昭和初（天理図書館蔵））

いはば、秋の月を見るに、曉の雲にあへるがごとし。  
わが庵は都の辰巳しかぞ住む世をうち山と人はいふなり  
よめる歌多く聞えねば、かれこれをかよはして、よく知らず。  
小野小町は、古の衣通姫の流なり。あはれなるやうにて、つよからず。いはば、よき女のなやめるところあるに似たり。つよからぬは女の歌なればなるべし。

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを  
色見えて移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける  
わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ  
衣通姫の歌  
わが背子が来べき宵なりささかのに蜘蛛のふるまひかねてしるしも  
大友黒主は、そのさまいやし。いはば、薪負へる山人の花の蔭に休めるがごとし。

思ひいでて恋しきときは初雁のなきて渡ると人は知らずや  
鏡山いざたちより見てゆかむ年経ぬる身は老いやしぬると  
このほかの人々、その名聞ゆる、野辺に生ふる葛の這ひひろ  
ごり、林に繁き木の葉のごとくに多かれど、歌とのみ思ひて、  
そのさま知らぬなるべし。

谷に姿を隠した悲しみの日はありませんでしたか  
宇治山の喜撰法師は詞がひかえめであって、歌の筋道が確かではありません。いつてみれば、秋の月を見ているうちに、曉の雲におおわれてしまったようなものです。  
〔私は都の東南にあはら屋を作り、かように暮らしております。その宇治でさえも、やはり憂き里である人様はいわれるそうです〕  
喜撰の歌はたくさん知られていませんので、あれこれと参照して、十分に検討することができません。  
小野小町の歌は昔の衣通姫の系統でありますが、強きをもっていません。いふなれば病に悩んだ高貴の女性に似ております。強くないのは女の歌だからであります。  
〔あの人のことを思いながら寝たので夢に見えたのだから。それを夢と知ったならば目を覚ますのではなかったらうに。〕  
色がないけれどもうすくなるものとは何だらう。同じ花でも人の心に咲く花だった。  
こんなにおちぶれて私自身がいやになっているのですから、根なしの浮草同然、誘いの水さえあればどこへでも流れていこうと思っておりますよ。〕  
衣通姫のお歌  
今晩は夫が訪ねてきてくれそうだ。蜘蛛の動作でそれが今からよくわかるよ〕

る(者)である。「歌とのみ思ふ」は「真名序」の「艶ヲ以テ基トシテ」を参考すると、単なる恋の歌でもそれで結構だと思つてゐるという意であらう。

一 今上天皇。ここでは醍醐天皇をさす。「今すべらぎ」で一語。二 春夏秋冬のめぐることが九回になつた。醍醐天皇が即位なさつてから九年目とは延喜五(八三)年である。  
三 天皇の慈愛を波にたとえ、下に「鳥(八洲)」「流れ」などの縁語を用いてゐる。  
四 普通は「大八洲」といふ。国土削成の神話に基づいて淡路島を除き、日本を構成する八島を大八洲といふ。  
五 筑波山の木陰は君の恵みにたとえられる(一六六・三五)。歌は「仮名序」で前に引用される。  
六 「政治をとる」の尊歌語。  
七 「見る」の尊歌語。見るものは三行先の「万葉集」にはいらぬ古歌と撰者たちの歌である。  
八 この語は三行先の「奉らしめ給ひてなむ」にかかる。延喜五年に「古今集」の編集が完了したかどうかについては諸説があるが、解説「四」を参照せよ。  
九 中務省に属し記録をつかさどる役人。  
一〇 官中の書物を保管する役所の役人で、別当(長官)の下の地位。  
一一 甲斐の国司の四番目の役。↓

「三」古今集の編集過程

かかると、今すべらぎの天の下しろしめすこと、四つするとき、九のかへりになむなりぬる。あまねき御慈しみの波、八洲のほかまで流れ、ひろき御恵みの蔭、筑波山の麓よりも繁くおはしまして、萬の政をこしめすいとま、もろもろのことを捨てたまはぬ余りに、古のことをも忘れじ、旧りにしことをも興したまふとて、今もみそなはし、後の世にも伝はれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐少目凡河内躬恒、右衛門府生壬生忠岑らに仰せられて、『万葉集』に入らぬ古歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。  
(5)それがなかに、梅を挿頭すよりはじめて、郭公を聞き、紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、また、鶴亀につけて君を思ひ、人をも祝ひ、秋萩・夏草を見て妻を恋ひ、逢坂山にいたりて手向を折り、あるは、春夏秋冬にも入らぬくさぐさの歌をなむ撰ばせ給ひける。(6)すべて千歌二十卷、名づけて『古今和歌集』といふ。

大友黒主の歌は姿がひなびています。いつてみれば、たぎぎを背負つた山人が花の陰に休んでゐるといった様子であります。「あなたを思い出して恋しくたまらない時は、空を鳴いて飛ぶ初雁のように、私もお宅の近所を泣きながら歩くのですが、それをこ存じなにかしら。」

さて、鏡山に立ち寄つて私の姿を映してさう。年を経たわが身が老い込んでいなかろうかと思ふから) これら以外の人々で歌を詠んだとして名前が知られてゐる者は、野辺に生えてゐる蔓草のように広がり、林に茂る木の葉のように数は多いのでありますが、詠みさえすればなんでも歌だとはかり思つて、真の歌のあり方を知らないものであります。 (五)この時に際し、今上陛下が国を治め始め給うてから、四季のめぐるとは九回を数えたのであります。至らぬところはなきご慈愛の波は日本の島々の外にまで流れだし、広大なご恩恵の陰は筑波山の麓に在るよりもこまやかであります。数限りない政務をご覧になる暇をさいて、あらゆる方面の事柄をお捨てにならぬという思召しの結果、昔のことも忘れまい、古くて顧みられないことをも再興しよう、今はご自身もご覧にならう、後世にも伝われよとて、延喜五年四月十八日に大内記紀友則・御書所

かくこのたび集め撰ばれて、山水の絶えず、浜の真砂の数多く積りぬれば、今は、飛鳥川の瀬になる恨みも聞えず、さざれ石の巖となる喜びのみぞあるべき。

それ、まくら、ことは、春の花匂ひすくなくして、空しき名のみ、秋の夜の長きをかこてれば、かつは人の耳に恐り、かつは歌の心に恥ぢ思へど、たなびく雲の立ち居、鳴く鹿の起き

飛鳥川の瀬は変わらぬ、さざれ石が大岩石になるまで、永遠に歌の栄えのを祝う喜びばかりが満ちあふれております。 さて、私たちは自分の歌が春の花として色艶に乏しくて、むなし名譽だけが秋の夜となつて長く続くことを嘆いておりますので、一方では世人への聞こえをばか

(原稿本内府書院部蔵)

歌は、貫之らがこの世に同じく生れて、このことの時にあへるをなむ喜びぬる。

三 実際には「万葉集」の歌が何首か漏してゐる。  
四 「なむ」は助詞。下に「ありける」のような語が省略される。  
五 以下、三行先の撰ばせ給ひけるまで、春・夏・秋・冬・賀・恋・離別・養の歌などに分類がなされたことを意味する。現行の分類と一致しない点があるのは大要を記したためである。  
六 ここでは「絶えず」の比喩としても序詞としても同じである。  
七 これも「数多く」の比喩とも序詞ともみられる。  
八 飛鳥川の瀬は変わらぬ、さざれ石の比喩とされた。一六七・九三・九四。  
九 「仮名序」でも前に引かれる。  
一〇 「まら」は「われらの誤写だろ」とある。「臣等」をマクラと読むことがある(契沖)ともいうが明らかでない。「まくら」の代りに「貫之ら」とする古写本もあり、「真名序」には「臣等」とある。  
一一 「匂ひ」の枕詞。  
一二 「長き」の枕詞。  
一三 「恐る」の連用形。当時、この語は四段でも活用した。  
一四 「立ち居」の序詞。  
一五 「起き臥し」の序詞。  
一六 「古今集」が編集される時代。

一陳鴻の『長恨歌伝』の「時移り事去り、楽シミ、風キ悲シミ来タル」によつて書かれる。  
二存続するでしようよ。「をや」は感動を表す。  
三柳の枝が長いことから、「絶えず」の序詞となる。  
四松が常緑であることから「散り失せず」の序詞となる。  
五「定家萬葉集」とも言い、萬葉の一種(三七七)。ここでは「長く」の序詞。  
六「久しく」と「まると」の序詞。なお「鳥の跡」は文字をも意味するので(一九六)、歌の文字すなわち古今集を暗示する。  
七とまづいてゐるならば、「ら」は完了の助動詞「り」の未然形。  
八この句に「古今集」の「古」の字と「今」の字が隠されているが、前に「名」をつけて古今和歌集といふとあるから蛇足のきらいがある。「真名序」には「たとひ時移り事去り」以下に相当する文章がない。  
九恋わないだろわか、必ず恋うだろ。「め」は「む」の已然形。それ「かも」などがつくと反語になる。

人麿亡くなりたれど、歌の事とどまれるかな。(30)たとひ時移り事去り、楽しび悲しびゆきかふとも、この歌の文字あるをや。青柳の糸絶えず、松の葉の散り失せずして、まさきの葛長く伝はり、鳥の跡久しくとどまれば、歌のさまを知り、この心を得たらむ人は、大空の月を見るがごとくに、古を仰ぎて今を恋ひざらめかも。

り、他方では歌の本旨に対して恥ずかしく思うのでありますが、常に立ち居につけ、起き臥しにつけて、われら一同この大御代に生まれ合せて、古今集編集という好機に遭遇しましたことをひたすら喜んでゐるのであります。  
人麿はすでに故人となりましたが、歌の道は残っていたのであります。今後はたとえ時勢が変遷し、栄枯盛衰がこもごも訪れようとも、この歌の文字だけはきつと永続いたしまししょう。この歌集が青柳の糸の絶えぬごとく、松の葉の散り失せぬごとく、まさきの葛の長くのびるごとく、砂上の鳥の跡の久しく残るごとくに、長く後世に伝わりますならば、歌のあり方を知り、物事の真意義をわきまえてゐるような人は大空の月を見るがごとくに、歌の初めて興隆した古を仰ぎ、本集の編まれた今の世に必ず憧れることでありましよう。

古今和歌集 卷第一

春歌上

1 年のうちに春は来にけりひととせを去年とやいはむ今年とやいはむ  
〔六帖一・歌合六〕

2 袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ  
〔六帖一・新撰〕

題しらず

読人しらず

古今和歌集 卷第一

春の歌上

1 年内だというのにもう春の訪れだ。春が来た以上、過ぎ去ったこの一年を去年と呼ぶべきだろうか。それも、正月が来るまでは今年と呼ぶべきだろうか。ここにうたわれた春は暦の上だけのもので、このように季節の風物が全くうたわれていない歌は当時としても珍しい。しかし、巻頭の序曲ともいうべき歌としては、このほうがむしろ好ましい。季節の推移に伴う自然の変化を具体的に表現することは、後続の歌に譲るといふのである。  
立春の日には詠んだ歌 在原元方

2 暑かった夏の日に、袖の濡れるのもいとわず、手にすくって楽しんだ山の清水——それが寒さで凍りついてゐるのを、春立つ今日の暖かい風が、たぶん今ごろ解かしていることだろう。  
去年は水をつぎ今年水は解くと、対句的に詠んだのは貫之らしい技巧である。中国古典の語句に基づきながら、平安朝人の具体的な生活感情を巧みに形象化した歌。  
題知らず

題知らず

読人知らず